

乳幼児をもつ母親のインターネット利用と子育て不安

藤谷 智子

(要旨) 武庫川女子大学子育てひろばを利用している保護者を対象に、子育てひろばの利用と子育て不安、および子育て環境に関するアンケート調査を実施した。その結果の中から、インターネット利用と子育て不安との関連性を中心に報告する。子育てに関する情報をインターネットから得るだけでなく、積極的に情報を発信したり、子育て不安の解消に役立てたりしている現代の母親の姿が浮かび上がった。子育て支援においては、母親の子育て環境と育児不安の現状を踏まえ、母親による自分の子育てについての省察と自己決定を支援していくことが求められる。

キーワード : 子育て支援, インターネット利用, 子育て不安, 省察

1 子育て環境と子育て支援の現在

(1) 子育て環境の変化

子育て環境の変化をめぐっては、近年、多くの著作において、核家族化や少子化、地域の子育て機能の低下、またそれらに関連した子育ての孤立化が指摘されている。例えば、朴(2012)¹⁾では、現代の子育て環境の特徴として、親子の孤立化、地域社会の子育て力の低下、子育てに関する価値観の混乱を挙げており、それらが複合的に家庭における子育てに影響していると論じている。

子育てが家庭内で孤立化する一方、子育て情報に関しては、インターネットの急速な普及によって、様々な情報が取得可能なものとなっている。それらの多様な情報が、子育てをさらに不安なものにしたり、あるいは取得した情報を基にした、それぞれの家庭のしつけ観としつけ方略の形成に繋がっていたりする。また、近年では母親が日常的に子育て情報の参照だけでなく、発信を行っている現状も報告されている。母親の意識としても、NTT西日本(2009)²⁾では、84.6%の母親が「子育てにインターネットは必要」と答えており、今や子育てにとってインターネットはなくてはならないものといってもよい時代になってきている。

インターネット上の子育て情報には、その発信者によって(市町村といった公的機関の発信か否かという違い)、対象者によって(専業主婦を対象としたものか、仕事と育児の両立のための情報を求める人か否かといったこと、あるいはより具体的な子育て状況の違いによる違い)、内容によって(単なる情報発信から育児の相談まで、多様な内容)、実に様々なサイトが存在する。

また、その内容は玉石混濁というのが、子育て情報に限らず、インターネット情報の特徴である。利用者

側がそれらの情報をいかに活用するかという問題についても、利用者側の責任もあれば、インターネットに内在する仕組みによる場合もあり、多くはその両者の複雑な絡み合いによっている。2014年3月には、ベビーシッターのマッチングサイトを利用した母親が、わが子を亡くしてしまったという痛ましい事件も起こっている。

子育ての孤立化とインターネット情報の多様化を背景に、乳幼児を子育て中の親にとっては、子育て不安のあり方も、またその不安の解消の仕方も変化しているというのが、現代の姿であると言えよう。インターネット情報が、一方では子育て不安を増大させ、また他方では不安の解消をもたらしているのである。しかし、容易に手にすることのできる情報によって、子育て不安の解消がなされればそれで良しということではなく、こうした点にも子育て支援の難しさがある。

(2) 子育て支援施設としての「子育てひろば」

母親が孤軍奮闘しながら子育てに専念し、不安を抱えている状況を変えるためには、社会全体で子育てを支えていく必要がある。

子育てへの支援策について、厚生労働省は、子育てひろばなどの「子育て支援施設」を、「地域子育て支援拠点」として位置付けている。ひろば型、センター型、児童館型があるが、全国では平成24年度には計5968か所が地域子育て支援拠点として子育て支援交付金を受けている。西宮市でもひろば型が13箇所ある。その事業内容としては①交流の場の提供・交流促進、②子育てに関する相談・援助、③地域の子育て関連情報提供、④子育て・子育て支援に関する講習等を行うものであるとされている(厚生労働省, 2013)³⁾。

本学の「子育てひろば」は、平成21年に「西宮市地

域子育て支援センター事業補助金交付要綱第7条」に基づく事業の実施機関としての指定を受け、週3日の開設で運営している。内容としては、先の厚労省が指定している事業内容に加えて、学生ボランティアの日常的受け入れと養成、特に支援を必要とする子育て親子への支援も行っている施設である。

子育て中の母親が、子どもに外での運動遊びを体験させたい、そして他の子どもとも関わってほしいと願い、親子で出かける先は、以前は公園に限られていた。「公園デビュー」という言葉が登場したのは1990年代であるが、近年では、この公園に変わる存在が、子育てひろばなどの子育て支援のための室内施設がとってかわりつつある(読売新聞, 2013.5.23記事⁴⁾)。

子育てひろばの役割は、単なる公園の代わりではなく、事業内容にも記載してある通り、親同士の交流や子育てに関する講習も含め、子育て中の家庭を地域の中で支援していこうというものである。この子育て支援施設における子育て支援においても、子育て中の親のインターネットとの関わり方の把握、子育てに関するインターネット情報の利用に関する情報の提供、それらを踏まえた支援がより重要となってきたと考えられる。

2 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

本学の子育て支援施設である「子育てひろば」を利用している保護者(主に母親)を対象として、質問紙調査を実施した。本研究の目的は大きく分けて、次の2つである。一つは本学のひろばを利用している母親の属性や心理的特徴と、ひろば利用の実態とその理由、ひろばへの要望等の把握である。もう一つが、変容する子育て環境の中でのインターネット利用の実態と、母親の意識との関連性を把握することである。本報告は、この2つ目の目的を中心とし、特に子育てにおけるインターネットへの依存度や利用の仕方と母親の子育て不安との関連性を検討することを目的とする。

(2) 調査の方法

対象者は、本学の「子育てひろば」を利用している保護者である。2014年1月20日から、順次手渡しをし、締め切りを2月14日とした。提出は、封をして回収ボックスに投入してもらうという形をとった。配布数は115部であったが、回収数は38であり、回収率は33.0%であった。予想していたよりも配布できた数、回収率とも低かったが、2か所の自由記述部分とも無回答だったのは2名のみであり、提出してくださった方々はそれぞれ熱心に回答してくださっていることが読み

取れるものであった。

質問項目は、本学のひろばを利用するようになったきっかけや利用頻度、ひろば利用の理由、子育てに関する不安、子育て情報の入手方法等の一般的な子育て環境、および実際のインターネット利用の仕方等から成り、A4サイズ3枚から成る。ほとんどの項目を選択式とし、自由記述としては、具体的にインターネットで便利さを感じていること、および本学ひろばへの要望の2項目のみとした。

3 調査結果および考察

(1) 対象者の特徴

年齢は20代後半から40代まで散らばっており、多かったのは、30代前半が14人、30代後半が12人だった。専業主婦が28名、それ以外は育児休業中であった。自宅から子育てひろばまでの所要時間は5分から30分、平均で13分28秒であった。手段はほとんどが徒歩(バギーを含む)か自転車であった。利用回数は、週3回と1回がそれぞれ9名だったが、週3回の利用者は、比較的近く通いやすいことが条件となっていることが示された。

子育てひろば利用の理由(複数回答)としては、全17項目のうち、多い順に①「子どもに同年齢の他の子どもと触れ合う経験をさせたいから」(35人)、②「手遊びや運動遊びなどの子どもとのふれあい遊びを経験できるから」(27人)、③「保育士・ボランティアなど多くのスタッフがいて安心だから」(26人)、④「家の中で母子だけで過ごすことから解放されるから」(24人)、⑤「生活のリズムがつけられるから」(19人)、⑥「他のお母さんと知り合いになれるから」(18人)、⑦「子どものことで気楽に相談にのってもらえるから」(18人)であった。これらの結果からは、子どもの健全な発達のためという理由だけでなく、子育てによる閉塞感や子育てへの不安、さらにそれらへの支援に対する期待が伺われる。

(2) 子育てにおけるインターネットの必要性の認識と利用時間

既に述べた通り、NTT西日本(2009)²⁾では8割以上が「子育てにインターネットは必要」と回答しているが、調査方法がインターネットによるものであったため、その割合が実態以上に高かったとも考えられる。本調査においては、「とても必要」が9人(23.7%)、「どちらかという必要」が20人(52.6%)、合わせると対象者の76.3%となり、8割までは届かなかったが、インターネットの必要性は多くの人が感じていることがわかる。また、「必要ない」と回答した人はいなかった。

利用時間に関しては、「ほとんど使っていない」と「30分未満」で15人、「30分～1時間未満」が6人、1時間以上が17人であった。その中でも2時間以上と答えたのは4人であった。

インターネットの必要性和利用時間との間には、関連性があり、必要を感じている人の方が実際利用時間も長い傾向にあった ($\chi^2=7.582$, $df=2$, $p \leq 0.05$)。

(3) インターネットからの情報入手と利用

子育て情報の入手先(複数回答)について尋ねた結果として、「クチコミ」(21人)よりも、「ウェブの情報サイト」(26人)の方が多く、一番多い入手先となっていた。また「書き込み型ウェブサイト」(17人)も3番目に多く、テレビや本、雑誌等を上回っていた。インターネットからの子育て情報の入手が一般的になっていることが示されたと言えよう。

何に利用しているかについては、「とてもよく利用」と「まあまあ利用」を合わせた人数が多い方から順に、「7子どもの写真を送る」、「6子どもの医療に関する情報を入手」、「14子育てについての書き込みを参考にする」、「4子連れでの外出先の情報入手」、「1母親仲間(ママ友)とのメール」で、ここまでが50%を超えていた(図1参照)。

この利用内容について、どのような構造になっているかを因子分析(バリマックス法)によって探った。固有値1以上で寄与率10%以上の因子として、3因子が抽出された。因子1の因子負荷量の高かった項目は、「6子どもの医療に関する情報を入手」、「5保育園・幼稚園・教室などの情報入手」、「14子育てについての書き込みを参考にする」、「4子連れでの外出先の情報入

手」、「7子どもの写真を送る」、「8子どもの成長などを発信する」の項目(因子負荷量0.4以上)であり、まさにわが子の子育てに直結した情報入手と情報発信であった。因子2は、因子負荷量の高い方から順に「12子どもができるゲームの利用」、「10絵本の代わりに子どもに見せる」、「11童謡などの音楽を聞かせる」、「9子どもをあやす(泣きから関心をそらす)のに使う」であり、子育てツールとしての利用と言える。因子3は、「13子どもを叱ってくれるなどのアプリ利用」と「15子育てについての悩みを相談する」の2項目であり、依存的なしつけとも呼べるものであった。

(4) インターネット利用と母親の状況との関連

育児の閉塞感や不安の指標として、子どもの預け先の数と子育てに悩むことの多少とを取り上げ、それらが、情報の取得先やインターネットの利用の仕方と、関連しているかどうかを検討した(表1)。データ数が少ないためもあり、統計的に有意な差は得られなかった。傾向としては、①子育てに関する悩みの多い親の方が、よりインターネットを利用し、特に因子1の項目で利用が多いこと、②子どもの預け先を持たないの方が、保育園・幼稚園・教室などの情報を求め、子育てについての書き込みを参考にすること、③子どもの預け先を複数持つ人は、人との交流のためのメールや成長の発信などをより行っていることが示された。

自由記述からは、知りたい時にすぐ手に入れることができるというところに、多くの母親が魅力を感じていることが示されたが、同時に、インターネット上の情報は参考にはなるが、解決に結びつくものではないという意見も複数あった。

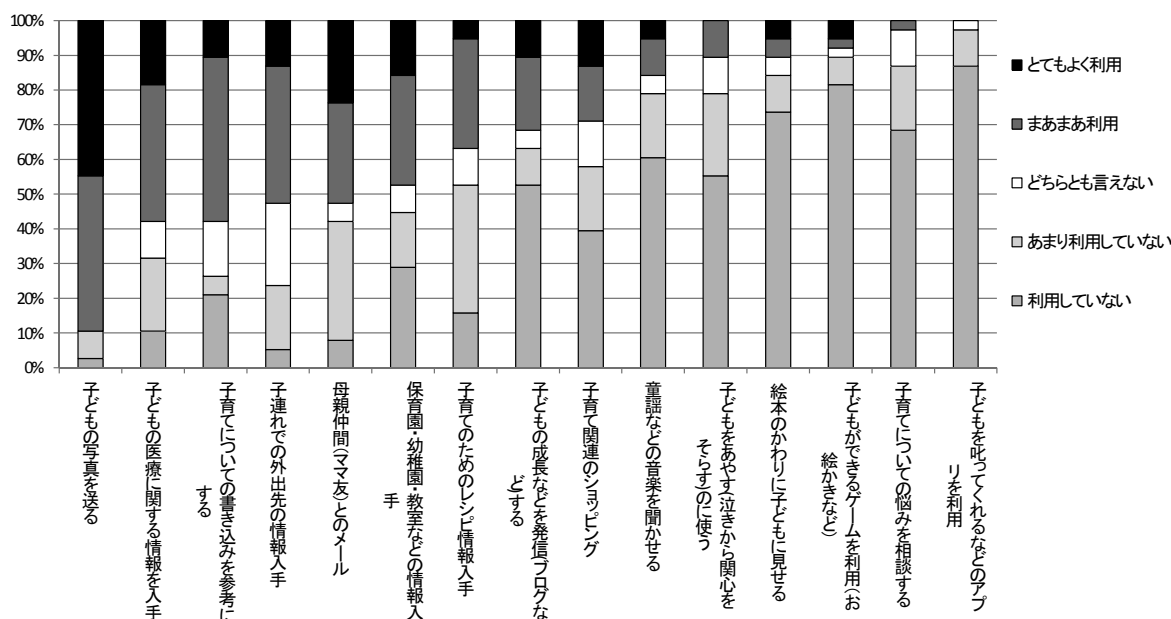


図1 インターネットの利用状況 (内容別)

表1 ネット利用内容の平均値の比較

	ネット利用内容															
	1ママ友メール	2ショッピング	3レシピ	4外出先情報	5保育情報	6医療情報	7写真送付	8成長発信	9あやし利用	10絵本がわり	11童謡音楽	12ゲーム利用	13しつけアプリ	14書き込み参照	15悩み相談	利用合計点
悩み多い(N=27)	3.33	2.51	2.78	3.56	2.81	3.52	4.30	2.41	1.70	1.74	1.85	1.52	1.15	3.15	1.52	37.90
悩み少ない(N=11)	3.09	2.27	2.64	2.91	3.09	2.91	4.00	1.91	1.91	1.18	1.83	1.18	1.18	3.36	1.36	34.80
預け先0か家族(N=14)	2.78	2.43	2.36	3.36	3.14	3.50	4.29	2.07	1.93	1.57	1.57	1.42	1.36	3.43	1.43	36.60
預け先複数(N=24)	3.54	2.46	2.96	3.38	2.75	3.25	4.17	2.38	1.67	1.58	1.96	1.42	1.04	3.08	1.50	37.13

4 これからの子育て支援とインターネット

(1) 母親と家族についての理解を踏まえて

子育て支援を行っていく上では、現代の多くの母親が、子育て情報をインターネットで入手し、子育ての悩みに関する書き込みを参考にしているという実態を踏まえる必要がある。母親の子育てについての思い込みが、インターネット上の情報に拠っていることもあり、単なるアドバイスでは母親の心に届かない。母親がなぜそのように考え、そのような躰をしているのかということへの理解と共感をもとに、相談を行っていくことが求められる。

(2) 子育てについての省察と自己決定への支援

母親の多くが、インターネットに依存しすぎることなく、自分なりにメリットとデメリットを理解し、利用していることが示された。しかし、中には、インターネットを通じて相談し正解を求める傾向のある母親も見受けられた。実際、筆者の「子育てひろば」での相談場面でも、インターネット上の情報だけで、子どもの発達障害を疑い不安に陥っていた母親もいた。

子育て相談においては、母親が既にインターネットなどから情報を手にしていることを踏まえて、時にはそれを吟味することを促すことが求められる。自分の子育てを振り返り、特にうまくいっていないと感じるときに、インターネット上の情報に飛びつくのではなく、複数の子育て情報から取捨選択し、あるいは自分なりの工夫を加えて、自分にあった子育ての仕方を見いだすことが重要である。そうした省察や自己決定の力を支援することも、子育て相談の役割であろう。

(3) 子育て支援システムとしてのインターネット

子育て支援にインターネットをより積極的に用いていくためには、まずは子育て情報を対象者にわかりやすく公開していくこと、また情報格差が生じないよ

うに紙ベースでの配付も行っていくことが挙げられる。

また、近年では、支援システムにインターネットを組み込む方向性も考えられている。例えば、白井他(2007)⁵⁾では、巡回相談をサポートする「子ども発達相談ブログ」を提案している。インターネットを用いて、巡回相談内容を共有し、巡回相談後の情報交換の場としている取り組みである。

インターネットを使った子育て支援は、今後ますますその重要性を増していくであろうが、一方的な情報公開だけではなく、双方向性の担保と、インターネット以外の複数の支援との組合せが必要である。

参考・引用文献

- 1) 朴信永, 第21章 子育てと親の省察, 湯澤正通・杉村伸一郎・前田健一(編著)「心理学の研究の新世紀③ 教育・発達心理学」ミネルヴァ書房, pp. 432-445 2012
- 2) NTT 西日本, 子育てへのインターネット活用実態調査「いまどきママの育児白書」について <http://www.ntt-west.co.jp/info/support/mom.html> 2009 (2013年12月20日にアクセス)
- 3) 厚生労働省, 地域子育て支援拠点事業とは, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate.html> 2013 (2014年2月26日にアクセス)
- 4) 読売新聞, 小さな子どもを持つ親「公園デビュー」足遠のく?, <http://www.Yomiuri.co.jp/komachi/news/20130516-OYT8T00826.htm> 2013 (2014年3月21日にアクセス)
- 5) 白井由希子・糠野亜紀他, 子ども発達相談ブログの提案と評価, 情報処理学会, 情報処理学会研究報告, 情報システムと社会環境研究報告, 85, pp.13-20 2007